



本プログラム創設者、日本代表

## 小林 登

(東アジア子ども学交流プログラム日本代表、CRN所長)

医学博士、チャイルド・リサーチ・ネット(CRN)所長、東京大学名誉教授。1954年東京大学医学部医学科卒業。米英留学。東京大学教授、国立小児病院院長、国際小児科学会会長などを歴任。日本医師会最高優秀功労賞(1984年11月)、毎日出版文化賞(1985年10月)、国際小児科学会賞(1986年7月)、勲二等瑞宝章(2001年秋)、武見記念賞(2003年12月)などを受賞。主な著作は、小児医学専門書以外には「ヒューマンサイエンス」(中山書店)、「子どもは未来である」(メイツサイエンス社)、「育つ育てるふれあいの子育て」(風濤社)、「風韻宛卑」子どものいのちを見つめて」(小学館)、「子ども学のまなこ」(明石書店) その他多数。

東アジア子ども学交流プログラム・2010年度報告書を出版することは喜びに耐えない。代表として、ひと言挨拶を述べる。

2010年度は、東アジア交流プログラムの第6回会議を、中国側の御協力のおかげで、北京で開催できた。歴史と伝統ある中華女子学院の立派な講堂で、11月23日、24日の2日間にわたり実施され、ほぼ満席になった。2日目の午後は、保護者向けの一般公開であり、中国側から、家庭教育における食育と子どもの潜在能力開発についての講演、続いて日本側の参加者も加わって、会場の出席者と活発な質疑応答が行われた。また「日本グッド・トイ展示会」もこの間に行われ、多くの見学者が集まった。

第6回のメインテーマは「幼小接続」であったが、残念ながら従来通り、日・中の研究者のみによる会議となった。子どもの教育は、生まれた時点からの親による育児、専門家による保育・就学前教育と続くが、それは子どもが発達に対応して、ひとつの流れとして連続的でなければならない。しかし、幼児の保育・教育と小学校教育の連続性は、理念ばかりでなく実践などの制度・方法により、如何なる国においても、しばしば問題になるのである。この会議で明らかになったのは、この幼小接続の問題は、当然と言えば当然であるが、日中では全く異なっているというところで、考えさせられる点が多かった。それは、文化ばかりでなく社会の在り方の違いによると考

えられるが、ぜひこの報告書を読んで、幼小文化の移行という立場から、皆さん方にもお考え頂きたい。

そもそも、東アジア子ども学交流プログラムは、現在では日本と中国が中心となっているが、東アジアのそれぞれ文化の異なる国々の研究者・実践家が、学際的、包括的な「子ども学」の立場で、それぞれの国の「子ども問題」child issues、解決に必要な情報を交換し、考える場である。お互いに比較し合うことで、学ぶ点も多いことは、どなたも賛成しよう。この報告書が、その情報提供の役を少しでも果たせることを願いたい。



中国代表

朱家雄

(東アジア子ども学交流プログラム中国代表、華東師範大学教授)

報告書刊行にあたって

華東師範大学教授、学前教育研究所長。中国学前教育研究会副理事長。上海市  
幼儿教育研究会副会长兼秘書長。中国教育部の国家プロジェクトである「学前教  
育学科養成目標「基準とカリキュラムの研究および実践」、幼児教育改革実践研究」  
などを担当する。

2010年11月、中国の首都北京で東アジア子ども学交流プログラムの6回目の会議が成功に開催されました。今回の国際シンポジウムのテーマは「幼小接続―教育の公平性と質の関係から」であり、日中両国からの参加者の人数が両日合わせて1500名にもなりました。政治学、社会学、教育学、小児科学などさまざまな分野の視点から幼稚園と小学校の接続問題について議論され、解決案と解決方向が検討されました。今まで行われた交流プログラムと同じように、今回の会議も社会の各領域から大いに賞賛され、ハイレベルな学術集会として認められました。

ここ数年、私は東アジア子ども学交流プログラムの中国側の代表者として、東京大学名誉教授・日本国立小児病院名誉院長、CRN所長である日本の著名な小児科医の小林登先生が提唱する「子ども学」が、日本と中国大

陸で次第に多くの人々に受け入れられていることを嬉しく存じます。日中両国の学者および社会各領域の関係者の協力のおかげで、実りの多い成果を上げていると言えるでしょう。この交流プログラムは、(株)ベネッセコーポレーションから支援をいただき、中国大使館、日本子ども学会、日本赤ちゃん学会、日本異文化比較学会、日中教育交流会議等の協賛を受け、社会各分野から承認され、賞賛されています。これは「子ども学」の普及と国際化が子どもたちとその発達、また社会にとって役立つことが証明されている表れです。

今回のシンポジウムには「親向けの育児相談コーナー」を設けました。この東アジア子ども学交流プログラムでは、初めての試みで、当日300名近くの保護者が熱心に会議に参加し、専門家の報告に耳を傾けました。また彼らが日ごろ育児の中で、感じていること、

困っていること、悩んでいる問題などについて、専門家に質問し、アドバイスを求めました。数10年間続いてきた学問の細分化した結果は、各領域の研究が深い方向に進めることができる一方で、学問間の横のつながりが断ち切られた現実も否めません。小林登先生が提唱された「子ども学」に賛同するのは、この学問が自然科学、社会科学と人文科学を有機的に結合することを主張し、育児に関する諸問題が総合的に研究し、解決することができると思うからです。

「子ども学」がさらに社会的に認められ、日中両国のさまざまな分野の関係者が交流するチャンスがますます増えることを願っています。我々が力を合わせて努力すれば、「子ども学」がいつそう豊かな成果を収めることができるかと確信しています。

## 東アジア子ども学交流プログラム2010

大会テーマ・幼小接続―教育の公平性と質の関係の視点から

巻頭言

000

## 第1章 ● 日本の現状と課題

003

小林 登

子どもは2つの情報によって育っている―遺伝と文化

004

秋田 喜代美

幼児期から児童期への教育―子ども・保護者・教師の経験から考える幼小文化間移行

010

榎原 洋一

小一プロブレムと発達障害

016

## 第2章 ● 中国における教育の公平性と質の問題

023

朱家雄

幼小接続についての考察

024

馮曉霞

義務教育の機会均等と入学準備

030

張燕

都市は、流動児童に基本的な就学前教育を提供できるのか？―平民教育は教育の公平性を実現するための選択肢である

035

王練

流動児童の親の子どもに対する期待と教育の現状調査―北京市のある村を例に

043

周念麗

就学前教育の公平性についての考察―湖南省37～48か月の幼児1000名を対象にした発達調査

049

鄒平

幼小の資源共有・双方向連携で、小学校入学への適応力を高める

055

万鈞

公開シンポジウム…講演1 食育―食へることで健康な体をつくる

060

朱家雄

公開シンポジウム…講演2 子ども早期能力開発

064

公開シンポジウム…会場での質疑応答

066

会場の声

070

日本グッド・トイ展示会

073